

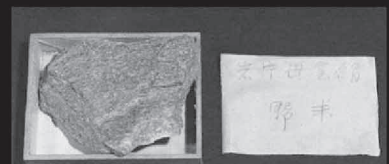


浅草オペラ東北・北海道巡業 函館大黒座における公演『地獄祭り』(1926年)



資料提供:清島利典氏

宮沢賢治直筆でメモされた岩石標本



資料提供:岩手大学農学部農業教育資料館

荒川の対岸から見た象ヶ鼻浄水場付近



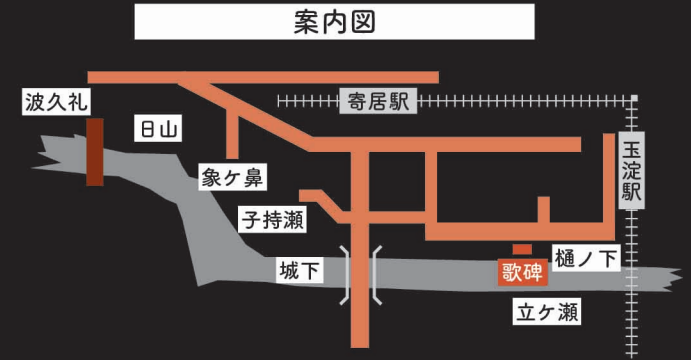
荒川沿いに佇む歌碑



上空から見た荒川



資料提供:㈱あーと・夢



『石ッコ賢さん』によると、1916(大正5)年9月3日寄居駅に到着。寄居から始まる「秩父巡検」(フィールド・ワーク)への期待と荒川沿いに見る立ヶ瀬、樋ノ下、城下、子持瀬、象ヶ鼻、日山、波久礼の地質と「石ッコ」への思いが賢治の視線で鮮やかに語られています。実際に末野、波久礼で採集し、賢治の直筆でメモされた岩石標本4個が岩手大学農学部に保存されています。一行は、その足で長瀬、親鼻橋近くの紅簾片岩(こうれんへんがん)等を調査します。常宿は国神(皆野町)の旅館「梅乃屋」でした。

さて、この本を読んでいくと、9月3日と4日の一行の行動が、先の行程と井戸川氏の推理(先の行程も推論が含まれるが)と食い違う場面が出てくるのです。井戸川氏の推理では、賢治たち一行は末野の「馬茶屋」に一泊することになります。また、著書には、「末野600番通り(末野神社周辺)」には十四棟の土蔵があったと書かれています。

現在、この歌碑は、小鹿野町にあります。もしかしたら、末野のことを詠んだ歌なのかもしれません。にぎやかな寄居の街に後ろ髪を引かれる思いを胸

山峡(やまかい)の町の土蔵のうすうすと
夕もやに暮れ
われらもだせり

現在、この歌碑は、小鹿野町にあります。もしかしたら、末野のことを詠んだ歌なのかもしれません。にぎやかな寄居の街に後ろ髪を引かれる思いを胸

の道すがら、函館の海を前にしてはるかなる浅草オペラをしのいで、「函館港夜光景」という詩の中に次のように詠っています。

(前略) 夜空にふるふピオロンと銅鑼、サミセンにもつれる笛や、繰りかへす螺のスケルツォ あはれマドロス田谷力三は、ひとりセビラの床屋を唱ひ、高田正夫はその一党と、紙の服着てタンゴを踊る (後略)

当時、関東大震災ですでに浅草オペラは壊滅していましたが、幻想の中に去来する賢治の浅草オペラへの思いは、なんと純粋で、憧れに満ちていたことでしょうか。(注1)

賢治は花巻農学校教師時代に、コミックオペレッタ『飢餓陣営』『植物医師』『ポランの広場』『種山ヶ原の夜』など、自ら脚本を書き、演出をして、農学校の生徒たちと演じていました。たとえば『飢餓陣営』の「バナナン大将」は浅草オペラの「ブン大将」との類似点を見ることが出来ます。いかに賢治が浅草オペラに影響を受けていたか推察されるところでもあります。

ところで、寄居町ゆかりの佐々紅華は、大正15年7月の下旬から10月の末まで浅草オペラ東北・北海道巡業をしています。仙台、八戸、盛岡、青森、函館、旭川、小樽、秋田、大曲、郡山等、延べ18箇所、77日間の興行だった。」ということ。(注2)

佐々紅華はその後、作曲家、プロデューサーとして頭角をあらわし、祇

に、峠を越えて国神(皆野町)の旅館「梅乃屋」についてから、その日の「心象」をスケッチしたのではないのでしょうか。なぜなら心象スケッチこそ、のちの賢治の真骨頂なのですから。

ここまで見ると、「そうか、100年前の寄居をあの宮沢賢治が歩いたのか」で終わってしまいます。実はもっと別なところで賢治と寄居はつながっているのです。



町立図書館では、宮沢賢治に関する書籍を約600冊所蔵し、「宮沢賢治コレクション」として特設コーナーを設けています。



※文中の行程等には諸説あります。一部推測を含みます。

やほり今から約100年前の1917(大正6)年10月、浅草六区での出来事です。日本館という劇場で、佐々紅華作のオペレッタ『カフエーの夜』が上演されました。当時の帝国劇場で上演された本格的な西洋オペラ興行が不振の中、わずかに十銭という安い木戸銭に当時の若者が熱狂したのでした。帝大や早稲田の学生、軍人や兵隊に職人、さらには、オペラ女優にაცოგარდრდრ多くの女性たちも。劇場につめかけた観衆は引きも切らず、浅草六区からひょうたん池まで長蛇の列ができたということです。そんな中の一人に賢治もいたのです。

そうした彼らは「ペラゴロ」と呼ばれていました。ペラゴロの中には、川端康成、谷崎潤一郎、サトウハチローもいました。「1984(昭和59)年2月4日、東京ヤクルトホールで催された宮沢賢治没後50年記念の集い「賢治へのいざない」の中で、関係者から宮沢賢治がペラゴロの一人であったことが明らかにされています。1918(大正7)年の暮れ以来、賢治は上京のたびに浅草オペラに通っていたのだそうです。その後、郷里に帰り、1924(大正13)年5月、花巻農学校の生徒を引率して修学旅行

園小唄「君恋し」などを作曲しています。1931(昭和6)年、妻いささんの実家のある寄居町玉淀に自らの設計で「京亭」を建て、亡くなる1961(昭和36)年の冬まで余生を楽しんでいました。享年74歳。その年の暮れ、フランク永井が歌ったリバイバル曲「君恋し」で第3回レコード大賞を受賞したのでした。

もしかしたら、東北の盛り場の劇場で、もしかしたら、函館の劇場のかたすみで、フロックコートの襟を立てボーラーハットをひざの上において、佐々紅華率いる浅草オペラ劇団の舞台を賢治が観ていたとしたらどうでしょうか。

2016(平成28)年9月、賢治が寄居を訪れて、100年を迎えます。宮沢賢治と寄居。もっとつながってもよいのではないのでしょうか。(注1) 雑喉潤著『浅草六区はいつもモダンだった』(注2) 清島利典著『浅草オペラ巡業』

本文協力 再発見佐々紅華の会・会長大谷州弘 参考文献 萩原昌好著『宮沢賢治「修羅」への旅』、井戸川眞則著『石ッコ賢さん―宮沢賢治と寄居―』

○宮沢賢治と浅草オペラ

に、峠を越えて国神(皆野町)の旅館「梅乃屋」についてから、その日の「心象」をスケッチしたのではないのでしょうか。なぜなら心象スケッチこそ、のちの賢治の真骨頂なのですから。